

項目	具体的取組	成果と課題	改善策・向上策
<p>1 教務部 (学習フィールドを自ら開拓し、学びを深めようとする生徒を育成する。)</p>	<p>①興味関心を持ち、学習領域を広げようとする生徒を育てるための方法について研究する。</p>	<p>・多様な興味・関心をもち、幅広く学ぼうとする姿勢をもつ生徒を育成する取り組みに対して、91.6%の保護者が肯定的に評価している。また、学習や読書などを通して、幅広く学ぶ意欲を持つことができた生徒は94.6%だった。いずれも高い数値を示しており、保護者は前年比+2.8%、生徒は-3.9%である。幅広く学ぼうとする意欲や主体的に探究する姿勢を育てる取り組みの成果が現れている。</p>	<p>・授業の中でICTを活用した新しい知見の獲得や多様な見方・捉え方を身に付ける学習活動を推進する。 ・ICTを活用して生徒が相互に学び合い、理解を深め合う学習活動のあり方を教員間で協議し、自ら幅広い知識を求める生徒を育成する。</p>
	<p>②習熟度に応じた学習支援や発展的な学習内容を取り入れた支援を通して、学習意欲を高め、深い知識と幅広い技能の習得を図る。</p>	<p>・中高一貫教育校の特色ある教育を受けて、学習意欲や学力の向上につながったと感じている生徒は93.8%であった。先取り学習、習熟度別学習や夏休み・冬休みの特別講座が生徒の学習意欲を高めたと言える。 ・中高一貫教育校が受験する学力推移調査で3年生は35位(目標10位)、2年生は24位(同20位)、1年生は31位(同30位)であった。3年間の中で段階的に基礎力を充実させ、発展的な学習内容を理解できる学力を育成する取り組みを継続する。</p>	<p>・調査前の放課後、学習到達度の差が生じやすい教科で習熟度別の授業形態を引き続き取り入れる。 ・各教科の授業において、発展的な質問や課題を設定し、学習到達度に応じて、より深く取り組めるような学習活動を行う。 ・同学年または異なる学年の生徒が互いに学び合う活動の実現を図る。 ・ICTを活用した効果的な学習支援の方法を研究し、教員間で共有する。</p>
	<p>③「使える英語」の習得を目指し、英語の4技能をバランスよく伸ばさせる支援を行う。</p>	<p>・昨年度と同様、1年生の80%以上が英語で自分のことや身の回りのことをある程度説明できたと回答し、概ね良好な結果であった。 ・昨年度と同様、2年生の80%以上が英語で身の回りや福井の事柄をある程度説明できたと回答し、概ね良好な結果であった。 ・昨年度と同様、3年生の85%以上が英語で自分の考えをある程度表現できたと回答し、良好な結果であった。 ・3年生の3月までに英検準2級以上を取得した割合は75.6%(2級29人を含む)であった。</p>	<p>・到達目標をより明確に提示して学習に取り組ませ、また自己評価する機会を増やすことで自己達成感を醸成する。 ・英語科と学年会等が連携して、「基礎英語」の朝活動を充実させるとともに、英語ディベート大会等の機会を活用して、英語の4技能を伸ばす。</p>
<p>2 生徒支援部 (自ら考え、自ら律し、互いを思いやり、自分の属する集団の質を高めようとする生徒を育成する。)</p>	<p>①生徒が生徒会活動や学級活動等を企画・運営できる機会を増やし、主体的な参加・行動を促す。</p>	<p>・代議委員会の発案で、県営体育館を使用して実施する「高志交流祭」を企画。実施に向けて、生徒が協議を重ねた。今回は、新型コロナウイルスの完成拡大のため中止となったが、既存の行事に囚われない主体的な行動であった。 ・これまで設置していた学校を良くするための意見箱を、匿名でも投函ができるよう変更し広く意見を募集した。投函された意見に対して、生徒会が回答するなど、主体的な活動が展開されている。</p>	<p>・生徒が主体的にやってみたいという意見や要望を全生徒から吸い上げ、困難なことでも生徒と向き合い実現できるようにサポートしていく。 ・生徒会や学年等の企画進行中の活動を「見える化」して、多くの生徒が関わられるように広報していく。 ・チャレンジしたことが実現できなかった場合でも、これまでの時間を価値あるものとして生徒が捉えられるように、適切な言葉かけを行っていく。</p>
	<p>②他学年の生徒や高校生との交流を通して、互いを認めあったり高めあったりできるよう、学校行事や部活動のあり方を工夫する。</p>	<p>・これまで行っていなかった中高生合同の代議委員会を毎週木曜日に実施。情報の共有や学校祭等の企画を協議した。 ・学校行事や部活動を通して、他学年との交流により、より良い学校生活を送ることができている。 ・高校生との交流については、学校祭等の中高で実施する行事を除き、十分な交流に至っていない。</p>	<p>・4期生(高1)と5期生(中3)との交流会、2期生(高3)と中学生が語る会を実施し、6年間を見通した中学校生活の大切さを学ぶことができ、新たな機会を模索していく。 ・クラスや学年、校種を越えた様々な交流で得られる成功体験を認識できるよう働きかけ、相互理解や努力研鑽につなげていく。</p>

<p>3 研究支援部 (将来にわたって「ふるさと福井」を思い、行動しようとする生徒を育成する。)</p>	<p>①地域社会やグローバル社会を多面的に理解し、発見した課題を解決しようとする態度を養うため、校内外での多様な挑戦や学年を越えた学びあいの機会を活用する。</p>	<p>・2、3学年とも、年度初めの時期に、昨年度実施できなかった研修の要素を取り込んだ研修を行うことができた。 ・学年の掲示板を整備し、高志学の様々な取組の状況を中学生全体で共有した。 ・各学年で獲得を目指す探究スキルの整理を意識して今年度の取組を行うことができた。 ・家庭での「高志学」等に関する会話について、およそ8割に達することができた。 ・今年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響で予定通りに実施できない研修もあり、1年を通じた計画的な実施は難しかった。ストーリーに沿った探究活動を進めることが難しく、「ふるさと福井」について考えを深めることが難しかった。</p>	<p>・地域社会や県内外・海外で活躍する人材との交流について、オンラインミーティングや電子メールでのやりとりなど、確実に交流できる手法の利用を拡充し計画的に取り入れて、適切な時期に生徒の探究活動支援を行えるよう配慮する。 ・従来の、学級・学年を解いた発表会等の取組は継続しつつ、(製作した成果物を配付する)など、集合型・対面型によらない成果交流の手法を拡充する。(例えば今年度2年生が作成した『小浜研修報告書』のような小冊子など)</p>
<p>4 教育相談 (自己肯定感をもって自分らしく生きることのできる生徒を育成する。)</p>	<p>②地域社会やグローバル社会の未来に貢献しようとする意欲を高めるために、「高志学」、教科、特別活動等の連携を深める。</p>	<p>「高志学」の授業と各教科の授業で獲得する探究スキルや探究の経験を整理し、それらの関連や連続性を、生徒・教員の双方が意識して活用できる授業づくりを目指した検討に取り組んだ。 一方で、何度もの臨時休校や長期の「実質休業」などにより、計画的な授業配置が困難となり、授業進行の効率も低下したことなどから、教科の授業における「ふるさと」に関わる取組の機会確保がやや難しかった。</p>	<p>・探究活動で求められるスキルに関して、その内容や、獲得および活用を図る時期について、「高志学」と各教科での取組を整理し共有する。</p>
<p>5 感染症対策 (新型コロナウイルス等による感染症から生徒・教職員を守る。)</p>	<p>①教育相談担当教員を中心に各学年の担当教員・当該クラス担任・支援員・スクールカウンセラー等が協力して、対象生徒の相談・支援を行う。</p>	<p>毎週、各学年会で支援を要する生徒情報を把握し、教育相談担当教員と情報を共有した。生徒の状況に応じて、支援員やスクールカウンセラーと協力しながら、きめ細かな支援を行った。</p>	<p>各学年には、似たような生徒の悩みや特性を持つ生徒がいるため、各学年の担当教員が情報を共有することで支援策をスピード感を持って実行につなげることができる。これまで以上に、縦の連携を強化し、対象生徒の支援につなげていく。</p>
<p>6 働き方改革</p>	<p>②教育相談にかかるアンケート等を実施し、悩みや心配事を抱える生徒の早期発見・対応に努める。</p>	<p>面談だけでなく、アンケートを活用することで、生徒は気軽に小さな悩みや心配事を打ち明けている。このように、アンケート等を活用した生徒理解が、生徒の学校生活の充実につながった。</p>	<p>今後も引き続き定期的にアンケートを実施し、悩みや心配事が多くなる時期の把握と小さな悩みを早期に発見し、適切な対応を行っていく。</p>
<p>5 感染症対策 (新型コロナウイルス等による感染症から生徒・教職員を守る。)</p>	<p>③教員対象の研修会を行い、生徒理解や気がかりな生徒の支援にかかる体制を整備する。</p>	<p>高校と合同で、毎月気がかりな生徒の情報共有、通級指導についての研修会を実施し、中高一貫校としての生徒支援のあり方を考える良いきっかけとした。</p>	<p>今年度は中学校教員向けの教員研修を実施することができなかったため、本校の生徒の現状に合わせた研修会の実施を行っていく。</p>
<p>5 感染症対策 (新型コロナウイルス等による感染症から生徒・教職員を守る。)</p>	<p>①感染症防止対策を講じる。 ・校内の消毒 ・健康観察 ・定期的な換気 ・保健指導 ・通信等の発行 等</p>	<p>・生徒教職員ともに、高い意識を持ち感染症防止に取り組んだことが、すべての項目において98%以上という数値につながった。 ・予防対策にあまり取り組まなかったと答えた生徒が2・3年生に2~3%いた。県内の感染状況に応じて、対策のメリハリをつけ指導する必要がある。</p>	<p>・本校は広域から生徒が登校しているため、次年度も各市町の対策を早期に情報収集し、本校での部活動や対外活動への対策に反映させる。そうすることで、家庭での兄弟間の対策に大きな差が生じず、保護者や生徒の安心や協体制への強化を図る。 ・県内の感染状況に応じて対策の重点化を図り、校内掲示物や集会・委員会活動を通して生徒が自主的に対策を継続するよう指導・啓発活動を行う。</p>
<p>5 感染症対策 (新型コロナウイルス等による感染症から生徒・教職員を守る。)</p>	<p>②感染症についての最新情報を提供するとともに、感染症に対して不安に感じている生徒を早期に発見し対応する。 ・感染症に関する項目を含むアンケートの実施(1か月に1回)</p>	<p>・アンケート結果から個人指導を実施することで、9月以降は感染への不安の訴えはなくなり、経済や社会活動への積極的な意見がみられた。 ・ただし、高校生の様子に不安を感じる生徒もみられたため、高校保健部と情報共有し学校全体で対策の徹底を図る必要があった。</p>	<p>・次年度もアンケートを継続し、教職員で情報共有して個別や集団指導の中で生徒の不安に対処する。 ・委員会活動で生徒同士が不安や対策への工夫を考え、発信する場を設ける。</p>
<p>6 働き方改革</p>	<p>業務の見直しおよび生徒と向き合う時間の確保</p>	<p>・業務改善に関する教職員の意識は浸透し、実行に移している割合はアップしている。 ・夏季休暇3日以上取得は9割を超えたが、年休10日以上取得した教職員は3割程度であった。 ・昨年から続いたコロナ禍での生徒・保護者の心の安定を図る必要性の継続や休校でも学びを止めない工夫や取り組みへの意識も高まったため、教職員が生徒と向き合う時間の必要性を昨年以上に強く感じるようになった結果と思われる。</p>	<p>・定時退庁日の継続や夏季休業中の学校閉庁日の長期化を実施するとともに、年間行事計画に休暇取得(勤務の振替)できる仕掛けを工夫し、休暇取得しやすい環境づくりに努める。 ・校内分掌等のチームとしての業務対応や中高一貫校としての部活動の協同運営の工夫などを行い、教職員の業務の見直しへの意識を高め、生徒と向き合う時間をさらに生み出す取り組みを進める。 ・遅出、早出勤の推進に努める。</p>